

景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 Town Design Aid, Japan <http://www.tda-j.or.jp>

2021-07-01

目次

P1

■巻頭

過剰性能が広がる韓国の都市景観

①増殖するパラソル

／(写真・文) オム・ジョン

P2～3

■TDA NEWS

連続 web セミナー第3回開催報告

1：“粋なまち” 神楽坂の魅力とその資源を活かした持続可能なまちづくりの取り組み

／鈴木 俊治

2：セミナー後の意見交換

／金子 祐介

■ランドスケープ事情

日本のランドスケープ黎明期

／戸田 芳樹

■新シリーズ 身近な景観をつくる

第1回：道路の植栽柵

／倉澤 聡

■景観ビジネス最前線

／大成ロテック(株)

■ホワイトボード



過剰性能が広がる韓国の都市景観 ①増殖するパラソル

コロナ禍で海外への移動が不自由になり、約2年ぶりに帰国した韓国の風景の中で最も驚いたことは横断歩道のあちこちに設置されていた日除けパラソルだった。最初は空港周辺だけに設置されているだけと思っていたが、実家の近くにも幅4メートルほどの広い横断歩道には写真のようなパラソルが設置されていた。さらに地域ごとに色彩やデザインに差別化を図られている。設置状況を調べてみると私が住んでいる仁川市だけでも約1,000基のパラソルが設置され、全国的にもその数は年々増加している状況である。久々に帰国した地元の風景に驚くと共に、行政が行う整備事業としてたかが30秒の待ち時間のためのパラソルはオーバースペックではないかと思いはじめた。

なぜ韓国では突然このような動きが起きているのか。まず一つ目は、気候変動で猛暑日が年々増加するなか熱中症のような事故予防対策として、パラソル整備は良い行政サービスだとの認識が広がってきたためと見られる。2013年ソウル市で始まったこの整備事業は、市民の間で徐々に良い事例として知られるようになり、全国的に広がってきた。政府は今後も整備予算を増やしていく予定であるという。二つ目の要因として、2018年の地方財政法改正により住民参加予算制度を通じて、地方自治体が行ってきた予算編成権を地域住民が直接行使するようになったことが要因と見られる。予算編成の過程で、市民自らが意見を示し、その意見や提案を反映して町の整備事業が進むこのような制度が現在、過度期であり住民が他事例を見て景観を考えずに模倣するなど多少無分別な整備が行われている面があると考えられる。

今後もこのような動きは収まりそうにない。韓国ではオーバースペックであっても即時に効果が見られるこのような事業について国民が満足していると評価しているが、根本的な解決方法として他の対策は考えられなかったのか疑問である。街路樹などの緑化整備や遮熱性舗装(Cool Pavement)などの間接的方法でヒートアイランド現象や都市の温度を下げていく方法もあるだろう。しかし、即効的で目に見える効果をより優先する韓国の行政姿勢と国民性は、今後もこのような動きを自粛する気配がないように見える。

オーバースペックで無分別に増加するこのような整備事業に対して、都市景観を提案していく我々の役割は、気候変動といった諸課題とともに景観的課題も解決するより本質的な都市整備を考え提案していかなければならないのではないか。 都市デザイナー／TDA正会員 オム・ジョン

連続 web セミナー第3回 「"粋なまち"神楽坂の魅力とその資源を活かした持続可能なまちづくりの取り組み」開催報告

景観デザイン支援機構連続WEBセミナーの第3回を2021年5月21日に開催した。街をどう考えるかをこのコロナ禍は教えてくれている。今まで気がつかなかった街の姿の些細な部分に、目が止まったり、小さな感動をした方が多いのではないかな？今回、美しい路地空間を持つ神楽坂で、長年活動を続けてきた、NPO法人粋なまちづくり倶楽部副理事長で芝浦工業大学の鈴木俊治氏をお招きし、「"粋なまち"神楽坂の魅力とその資源を活かした持続可能なまちづくりの取り組み」と題したWEBセミナーを開催した。

1

「粋なまち」神楽坂の魅力とその資源を活かした持続可能なまちづくりの取り組み
鈴木 俊治 芝浦工業大学教授/NPO法人粋なまちづくり倶楽部副理事長

はじめに

神楽坂は「粋なお江戸の坂のまち」として、30年以上にわたり多くのまちづくり活動が展開されてきた。近年は飲食店の進出が増加し来訪者が増えていたが、コロナ禍で商業、文化活動は大きな打撃を受けている。本稿では、今日の神楽坂の主な都市問題とその対応についてご紹介したい。

今日の主な都市問題

神楽坂は延長700mほどの神楽坂通りを中心とした比較的小さなまちだが、そこには商業、住居、文化、寺社、オフィス業務など多様な要素がある。さらに一口に商業といっても花柳界はじめ非常に多様な店が集まっている。文化的にも、伝統芸能からモダンアートまで活動している。むろん例外はあるが、多くの事業者が地形や歴史にもとづいた神楽坂の地域資源を活かした商売をし、神楽坂が好きで住んでいる住民が少なくない。その多様性や神楽坂への想いが神楽坂の魅力であり、持続可能なまちづくりの推進力であろう。そのなかで、建築・都市計画や景観づくり、環境デザインという視点に立てば、主な今日の問題としては以下が挙げられる。

1. 神楽坂の伝統的路地界限は、現行法規と経済状況のもと、急速に変質しつつある。そのSense of Placeを次世代に向け

て適切に保全、継承するにはどのようにすればよいか？



神楽坂を代表する路地景観

2. 都市計画道路「大久保通り」の拡幅計画について、拡幅される道路空間をどのように活用すべきか。また、隣接地区との合意形成、東京都との協議をどのように進めるべきか？



道路拡幅事業が進む大久保通り

3. 神楽坂通り（商店街）の都市景観の現状をどのように評価するか。その保持と改善にはどのような方策があるか？

4. 外堀の文化的価値や環境をどのように評価するか。環境を改善し、市民により親しまれる水辺空間にするにはどのようにすればよいか？

ランドスケープ事情

日本のランドスケープ黎明期

■高度成長時代とランドスケープデザイン

1960～1970年にかけては、公共空間での多くの造園計画がはじまり、庭園スケールから都市スケールに対応できる造園家が求められていた。しかし、「ランドスケープアーキテクチャー」という概念は一般社会どころか造園の世界でも理解が乏しく、当事者達もどのような職能なのか暗中模索の状態であった。

その中であって、日本の庭園史を学び且つその造園技術を習得し庭園や外構計画に携わり、高品質な作品を残している先人達がいた。その代表格は、中島健、小形研三、荒木芳邦、伊藤邦衛などで、当時40歳代の働き盛りの造園家であった。今なら、この時がランドスケープアーキテクトの萌芽期だったと言えるが、彼らがどのように思っていたかは想像できない。ただ、限定された敷地の庭づくりという職能から少し広い世界を相手にし始めたのは確かであった。また当時、建設省（現・国交省）の主導で公園・緑地の拡充・大規模国営公園の計画が進められており、ランドスケープアーキテクトの活躍の場も用意されつつあった。中でも特にデザイン力を示した伊藤邦衛の作品を通して、造園家がどのようにランドスケープアーキテクトに脱皮したかを見ていきたい。

■伊藤邦衛の活動

彼は都市公園を始め、多分野において多くの作品を残している。昭和記念公園入口のカナールでは、軸線をバロック庭園の様に仕立て、ダイナミックな空間をつくった。西洋の



昭和記念公園のカナールと噴水のカナールと噴水



三景園の池泉と渡り廊下



神楽坂の入口 外堀の水辺

これらの問題には法制度、経済状況、税制、財政などが複雑に関係し、権利者の意向もさまざまである。そこがまちづくりの難しさであり、おもしろさでもあろうか。まちは生き物であり、長い目で見れば、まちへの想いが強い住民や商業者の意向を受けて動いているように思える。

路地界隈の景観 保全と継承

上記の諸問題のなかで、ここでは路地界隈の景観問題について述べたい。神楽坂花柳界は戦前の昭和10年ごろが最盛期、次いで戦後高度成長期の昭和30~40年代ごろと言われるが、当時はほぼすべてが木造低層建築物であった。第二の隆盛期から50年ほどが経過し、多くの木造建築は更新時期を迎えているが、現行法制度では前面道路幅員が4m以上（みなしを含め）で、耐火建築物とすることが求められる。一方、都心に位置する神楽坂の地価は高く相続税も高額である。そこで建物更新をしようとする、どうしてもセットバックして出来るだけ建築高さや容積を稼ごうとする。そのことが、多くの人たちが大切に

たい伝統的景観の変質につながっている。今日、路地界隈の商業は花柳界だけではなく多様化しており、それにもなう建築デザインや建築と路地の関係性の変化が見られ、それは単純に良し悪しを判断できることではないが、路地界隈らしさの継承には、何が規範となるべきか、地域で協議する場が必要であろう。



路地界隈の新旧の建築物

今日の状況は画一的な基準に基づく近代都市計画の破綻を示す一例である。都市計画は、都市の防災不燃化やインフラ整備だけではなく、文化的価値の保全や生活しづげられる環境の保持も、本来その基本的概念として有するべきである。それらの点は地域によって異なることから、地域主体で都市計画をつくり運用するしくみが必要であり、地域側も行政機関に任せるだけではなく自ら関わっていく覚悟が求められる。まちづくりに関する国や広域行政の役割は、意欲のある地域をサポートしていく方向に転じていくのであろう。

2 セミナー後の意見交換 金子 祐介

城西国際大学環境社会学部助教
/ TDA 正会員

本webセミナーでは、左記の鈴木氏の講演に対し、「神楽坂は現在、開発と保存の間で揺れ動いているとの報告が批判的になされたが、こうしたものが次の時代を形成する「歴史的な商店と新都市が並存する（銀座、丸の内に次ぐ）第三のモデル」になり得るのではないか？」といった当機構名誉会員の曾根幸一の意見を皮切りに、活発な意見交換がなされたので、その一部を紹介します。

●行政から仕掛け、その上でまちづくり協議会へ協力を求め、行政の指針や地域の地区計画をつくっていくようなこれまでのやり方とは異なり、一部が株式会社化したNPO法人が主体的にまちの運営に携わっていくことが、これからの地域まちづくりのモデルとなり得ることが理解できた。また、新規参入の商店に、神楽坂憲章といったもので、「地域の歴史的価値や文化を引き継いでいく方法」をシステム化し、地域に根ざしてきたステークホルダーから橋渡ししていくことも今後必要になっていくことがわかった。（国吉直行：当機構副代表理事）

●<地区計画>策定といった枠組み作りだけでなく、銀座や自由ヶ丘のようにローカルルールにより新規や改修の建築に対し、「神楽坂らしい」かどうかを評価していく、デザインレビューができるような仕組みづくりができればよいのではないか。

（倉田直道：当機構代表理事）

(株)戸田芳樹風景計画 戸田 芳樹



新宿「四季の路」



厳島神社の河川の造形

古典的な庭園手法も銜いも無く現代の公園に採用し、空間の骨格をつくる豪気さがこの時代らしかった。広島空港の庭園「三景園」は山中に厳島神社をイメージした本格的な日本庭園で、この2作品にはベースにある造園家としてのアイデンティティが見え隠れし、造園家の延長線上にある作品と見ることができる。

一方 新宿歌舞伎町の「四季の路」は都電跡地の谷底のようなスペースに魅力的な空間をつくり、人々を呼び込んでいる。ここは周囲との関係性を重視したアーバンデザイナーの仕事ぶりが見え、その進化が知れる。ただこの3作品には差こそあれ、造園的な発想と空間から解放されたランドスケープアーキテクトの職能に接近している経過を読み取れる。

秀逸なのが厳島神社山中における河川改修だ。そこに改修らしさは一切なく、自然河川と見紛うばかりの空間をつくり出している。コンクリート類は使わず自然素材を扱い、水流のコントロールをしている。例えば、山石で瀧を設けて流速を落としたり、流れを分散させて洪水を防ぐなどである。実際に歩いても自然の川、いやそれ以上に自然が感じられ、沢渡りやビューポイントも設けた「用と景」のバランスが美しく、これが河川改修のデザインなのかと驚かされる。ここでは造園から飛躍し土木デザイナーとして、ランドスケープアーキテクトの領域を拡張したといえる。

「これがランドスケープデザイン」とひとりで表現しなくとも、先人達が営々と作品づくりを進めた過程で、日本のランドスケープデザインは開花し始めたことを私達は知っておきたい。

第1回：道路の植栽柵



ゴミが投げ捨てられることも多い雑草繁茂の植栽柵、繁殖力ある雑草の種の周辺への拡散拠点にもなる



植栽柵に咲いたヒマワリ、近くの植栽柵には花が植えられるようになった

「身近な景観をつくる」は、身近な景観をより良くするための誰でもできるような日々のちょっとした工夫やひと手間といったヒントを探る連載である。

第1回は通勤や通学、散歩など日々歩く中で多くの方が見ているはずの道路の植栽柵を取り上げる。最近では雑草が蔓延り、荒れた植栽柵も増えていると感じられるが、それでも花が植えられ、低木の剪定が行き届いた植栽柵も多く見かける。それらは大抵、目の前の植栽柵ぐらいは綺麗にしようという沿道の方の生活文化・企業文化によって成り立っているといえる。それが大変なことかという一つの植栽柵自体はそんなに広くないのでそれほどでもない。雑草管理だったら月に10分もやれば綺麗に保てる。低木の剪定も道具さえあれば、年に1時間もかからないだろう。要は、植栽柵にちょっとした関心があるかどうか掛かっているといえる。

無関心を打破するにはやはりながしかの仕掛けが必要だ。慶応大の石川初さんと対談をしたとき、研究室で植栽柵にヒマワリの種を蒔き、その後の状況の観察を記録したとの話を聞き、早速翌年に真似をさせ

ていただいた。花を咲かす直前に切り取られることもあれば、水をあげる人や近くに花を植え始める人もいた。全く無反応な場所もあったが、人間模様が垣間見られるとともにちょっとした仕掛けで行動変容が見られるという面白い人間観察となった。

日々見かけるはずの道端や植栽柵、そこに生える雑草の名前や特徴をみなさんはどれだけ知っているだろうか？少し身近な雑草を観察し、雑草の多様な営みに気づくことは案外面白いものである。それぞれの生存戦略、競合関係、季節による違いなどを知ることができれば植栽柵だけでなく、庭などの手入れにも役立つことが多いだろう。

植栽柵のような無関心公共空間に関心を持ってもらうには野菜を使うのも面白いかもしれないし、近隣の人と相談して、ちょっと綺麗にしようよと一緒に手入れを始めて自分事化してみるのもいいかもしれない。気づいたところに少し手を入れてみる。日々通る道端の植栽柵にちょっと興味をもち、身近な実践を行いながら景観を考えるきっかけとし、地域の景観文化を育てていくことも大切ではないだろうか。

景観ビジネス最前線



since 1994

自然石舗装

インジェクト工法の歩み

2021年6月 実績写真集発刊



観光地や商店街の美装化に
景観性と耐久性を兼ね備えた
石張り舗装です

〒160-6112

東京都新宿区西新宿 8-17-1

住友不動産新宿グランドタワー

TEL:03-5925-9436

担当：秋山・捧（ささげ）

ホワイトボード

アジア諸国の都市部の更新は、日本とは比較にならないくらい早く、ダイナミックに変化する。それらのデザインや手法はもちろん、課題や問題点も参考にできることが大いにあります。また、まちの個性を活かしながら、そこで生活する人が主体のま

ちづくりを継続的に行うことは、大変なことです。そのきっかけは、そこで生活する人々の些細な気づきがきっかけなのかもしれません。今号から紙面の構成を少しずつ、変えていく予定です。皆様の忌憚のないご意見やご要望を頂ければ幸いです。



NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F (ユー・プラネット内)

Tel: 03-3847-3555 Fax: 03-3847-3375 E-mail: main@tda-j.or.jp

http://www.tda-j.or.jp https://www.facebook.com/tda.public

編集長：井上 洋司 名誉編集長：曾根 幸一 編集委員：矢内 匠/金子 祐介/倉澤 聡/中野 竜/オム・ジヨン

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。

(株)昌平不動産総合研究所/日軽エンジニアリング(株)

都市環境デザイン会議/(株)都市環境研究所

DTP: (株)アーバンプランニングネットワーク 2021071000